

27PA-am110

中学校における薬教育～授業による薬の知識に対する理解度の変化～

○圓子 沙織¹, 飯田 舞子¹, 杉山 陽香¹, 深沢 茉莉子¹, 山本 実可子¹, 三村 あずさ¹, 熊澤 美裕紀¹ (1明治薬大)

【目的】現在の日本では、高齢化に伴う医療費の増大により国民皆保険制度維持への危機が生じ、医療費削減の策としてセルフメディケーションの推奨が掲げられている。早期から国民のセルフメディケーションに対する意識を高めるために、平成20年には中学校学習指導要領が改訂され医薬品に関する指導が導入された。薬学生が中学校での薬授業を行うことで学生自身の学習意欲の向上やこれまでに習得した知識・技能を確認し、さらに中学生の薬の認知度を理解することもできる。

【方法】都内の私立男子中学校3年生に対し、薬の基礎的な知識についての講義20分及び講義と関連したOTC医薬品を用いた実験30分の計50分で授業を実施した。講義ではセルフメディケーションの言葉の説明、薬の必要性和使用法、薬の効く仕組み、血中濃度の変化、お薬手帳についてなどセルフメディケーションを行う上で必要となることに重点を置いた。さらに薬の構造や性質を理解することを目的とし、生徒参加型で3種類の錠剤とカプセルを用いた実験を行った。そして、授業前と授業後にアンケートを実施し、講義による知識・意識の変化と授業内容の定着を測定した。

【結果および考察】授業前後のアンケートからは、「薬は飲み物なしで服用してはいけない」・「薬を飲み忘れた場合1度に2回分を服用してはいけない」などのことについて理解が得られたことが分かった。今回の結果から中学生が薬に対し持っているイメージ、薬教育を受けることによりどのような理解の変化が生じるのかなどについて報告する。